The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	使役受身構文の意味と形式 : BCCWJに基づく記述的分析
Author(s)	孫, 聴雨
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2025, 2024, p. 4-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102193
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

使役受身構文の意味と形式

—BCCWJ に基づく記述的分析—

孫　聴雨

キーワード : 使役受身、（さ）せられる／（さ）される、コーパス分析

1 はじめに

日本語の「（さ）せられる／（さ）される」のような使役受身表現は、一般的に使役の表現「（さ）せる／（さ）す」に受身の表現「（ら）れる」が付加し、そこから派生した表現だと認識されている 。この表現の呼称については研究者によって異なり、松下 (1977) は「使動の被動」、村上 (1986) は「使役のうけみ」、前田 (1989) は「使役受動態」と呼んでいる。本稿では、この「使役受身」という用語に統一して論を進めることとする。使役受身構文の意味用法は従来、以下のように規定されている。

(1) 使役受身の「強制」意味と「誘発」意味[1]（日本語記述文法研究会 2009）

a. 「強制」: 意志動詞から作られ、被使役者が自分の意志に反して他者によって事態の実行を「強制」されることを表す。

b. 「誘発」: 感情や思考を表す動詞から作られ、ニ格の名詞やテ形の表す内容が原因となって、その感情や思考が生じたことを表す。

(2) 私は母に嫌いなものを<u>食べさせられた</u>。 [強制]

(3) 世の中の変化の激しさにはまったく<u>びっくりさせられる</u>よ。 [誘発]

（日本語記述文法研究会 2009: 248）

[1] 日本語記述文法研究会 (2009) では、使役受身の 2 つの用法に対して「強制」「誘発」という名称を使用してはいないが、便宜上、ここでは「強制」、「誘発」と呼ぶ。

しかしながら、こうした分類や説明では捉えきれない用法の存在も確認される。たとえば、「強制」は「意志動詞から作られる」とされているが、実際には以下のように無意志動詞を用いた使役受身文も『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』において確認される。

(4)　テーブルも乱暴に動かされたらしく、一台はひっくり返っている。

（『スピリット・リング』, BCCWJ, PB19_00101[2]）

(5)　ヴァイマル時代に過激な政党（ナチス政党）により共和体制が崩壊させられた。

（『EU と現代ドイツ』, BCCWJ, LBr3_00059）

これらの例においては、被使役主が人間や意志を持つ主体ではなく、無情物である。つまり、(1)の規定における「被使役者の意志」や「感情・思考」といった意味の前提が成り立たないにもかかわらず、使役受身表現が自然に用いられている。このことから、「強制」や「誘発」という従来の二分法では把握しきれない、より広範で柔軟な意味機能が使役受身表現には含まれていることが示唆される。

また、形態的な観点からも興味深い現象が観察される。たとえば、(4) の「動かされた」は和語「動く」を本動詞とする使役受身表現であるが、この場合、本来理論的には「動かせられる」と「動かされる[3]」の 2 つの形式が想定される。しかし、BCCWJ における「動く」の使役受身表現の 296 例すべてにおいて、「動かされる」形式が用いられており、「動かせられる」という使役受身形式の出現は確認されなかった。これは、使役表現における「（さ）せる」と「（さ）す」という語彙的選択に、使用上の偏りが存在する可能性を示唆している。

---

[2] BCCWJ から収集した例文はこのように、最後のところにサンプル ID を示す。

[3] 本稿では、「動かされる」という形式を、「動く」という自動詞に「（さ）す」形の使役が加わったものとして解釈し、使役受身表現に含めて扱う。ただし、この形式については「動かす」という他動詞の単純受身とみなす立場もなりえると考える。本稿では、形態的観点から、「（さ）される」形をとる表現をすべて使役受身の一種とみなし、その根拠は 5.2 節で詳述する。

以上のように、日本語の使役受身表現に関しては、これまで「強制」や「誘発」といった意味の類型化を通じた分析はなされてきたものの、語彙的・形態的な側面と意味機能において、体系的かつ包括的な記述は十分に蓄積されているとは言い難い。特に、動詞との生起実態や被使役主の有情性、「（さ）される」と「（さ）せられる」の使用傾向といった点に関しては、体系的な視点からの記述が今後の課題として残されている。

2 先行研究および研究課題

本章では、まず使役受身に関する先行研究を概観する。本稿では、使役受身に関する研究を、①意味用法の分類に関する研究と、②使役受身の適格性条件に関する研究の二つに大別する。2.1 節では意味用法の分類に関する研究を、2.2 節では適格性に関する研究を紹介し、最後の 2.3 節において、先行研究の知見を整理した上で、本稿の課題を提示する。

2.1 意味用法に関する先行研究

使役受身の意味用法に関しては、前田 (1989) 、小嶋 (1998) 、日本語記述文法研究会 (2009) による研究がある。

前田 (1989) は、「被役」と「誘発」という用語を用い、使役受身の用法を二つに分類して詳細な分析を行っている。まず「被役」用法については、(6)のような規定を設け、(7)のような具体例を提示している。この用法では、「強制」による不本意さや迷惑感が被使役者に生じることが特徴とされる。ただし、前田はこれに当てはまらない「中立的な意味」をもつ用例(8)も指摘し、これは「文脈上、迷惑感が抜けている」ことに起因するとしている。また、主語が人間以外の場合の(9)の存在も言及している。

(6) 意志的動作を表す動詞によって作られる「被役」用法：
「A が C に V-(s)-ase-rare-ru」で A の動作 V は何らかの「強制」を受けたものであり、そのため、A にとって不本意なもの・嫌なものという気持ち、あるいは「強制」されたことによる「迷惑」感が表される。

(7) 宮田が電子音楽によって精神を<u>惑乱させられた</u>。

(8) こうして、お召列車の三つのタブーは、世界一の列車ダイヤづくりの職人達によって見事に<u>完成させられる</u>。

(9)　自分の暗殺によって、歴史が逆戻りさせられることはない。

（前田 1989: 25-28）

次に「誘発」用法については、感情・心理・知的活動に関する動詞によって構成されるとし、(10)のような規定と(11)のような例を示している。

(10)　感情や心理･生理状態を表す動詞と知的活動を表す動詞によって作られる「誘発」用法：
強い感情をある原因によって避けようもなく呼び起こされたことを表す。

(11)　本例の場合もそうなのだが、そんなときには、子供の成長する力の強さに驚嘆させられる。

（前田 1989: 26）

このように、前田 (1989) は使役受身の「被役」用法と「誘発」用法を区別しつつ、「中立的」用法や非人間主語の例にも着目しているが、どのような動詞との組み合わせでどの用法になるかといった体系的な分析は明示されていない。

小嶋 (1998) は、使役受身の用法を「強制」「不本意」「誘発」の三つに分類している。分類基準としては、動詞の意味に加えて、動作主と使役主体の性質も考慮されている。

(12)　使役受身の意味 3 分類

a. 強制「人(動作主)が人(使役主体)に～させられる(意志動詞)」
b. 不本意「人(動作主)がもの・こと(使役主体)に～させられる(意志動詞)」
c. 誘発「人(動作主)がもの・こと(使役主体)に～させられる(無意志動詞)」

（小嶋 1998: 168）

各用法の具体例として、以下が示されている。

(13)　結局みどりに出席する約束をさせられてしまった。　[強制]（小嶋 1998: 150）

(14)　「つめたいなあ」足から身内にあがってくる冷気に、自然に三人は言わせられるのであった。　[不本意]（小嶋 1998: 159）

(15)　弟が素直できょうだい仲のいいとき、姉というものは寂しいものという感じを味わわせられた。　[誘発]（小嶋 1998: 163）

この三分法は動詞の種類だけでなく、使役主と被使役主の有情性の違いにも注目している点で有意義である。しかし、「強制」と「不本意」の違いは必ずしも明確でなく、いずれも被使役主にとって望ましくない事態を表すため、分類の妥当性については検討の余地がある。

最後に、日本語記述文法研究会 (2009) では、使役受身文を二用法で区別し、それぞれを以下のように定義している。

(16) a.　意味 1：
意志動詞から作られ、被使役者が自分の意志に反して他者によって事態の実行を強制されることを表す。　[=強制]

b.　意味 2：
感情や思考を表す動詞から作られ、ニ格の名詞やテ形の表す内容が原因となって、その感情や思考が生じたことを表す。　[=誘発]

(16a)が本稿の「強制」用法に、(16b)が「誘発」用法に該当する。それぞれの例として、以下が挙げられている。

(17)　私は親友の結婚式で大勢の人の前でスピーチさせられた。
(18)　私はここのところずっと頭痛に悩まされている。
（日本語記述文法研究会 2009: 248,251）

「誘発」用法では、対応する能動文と近い意味になるが、使役受身文では原因と結果の関係に叙述の焦点が置かれるとされている。

以上より、各研究は使役受身の意味用法に関してそれぞれ異なる視点を提供しているが、分類の基準や網羅性において一定の課題を残している。

2.2 適格性に関する先行研究

使役受身文がどのような条件下で適格とされるかに関しては、影山 (1993) と高見・久野 (2006) による分析がある。

影山 (1993) では、動詞の非対格性・非能格性が使役受身文の適格性に影響があると述べている。

(19) a. 二人を離婚させる。／子供をジャンプさせた。 [非能格動詞]

b. 二人は離婚させられた／子供がジャンプさせられた。 [非能格動詞]

(20) a. 水を蒸発させた。／花を咲かせる。 [非対格動詞]

b. *水が蒸発させられた。／*花が咲かされた。 [非対格動詞]

（影山 1993: 61）

影山 (1993: 61) では、(19)の「離婚する」「ジャンプする」のような非能格動詞から作られる使役受身文が容認されると主張されている。非能格動詞の主語は他動詞の主語と同じく、動作主の機能を果たし、動作主としての主語は使役受身文の主語にもなれるためだと説明されている。一方、(20)のような非対格動詞において、主語は実質的に他動詞の目的語と同じ機能を果たし、非対格動詞から作られる使役受身文は不適格と述べられている。

しかし、高見・久野 (2006) はこれに反論し、非対格動詞を用いた使役受身文の容認例を提示している。

(21) 社員たちは、社長の突然の辞意に<u>驚かされた</u>。

(22) 人工照明で花が早く<u>咲かされても</u>、そんな花はあまり長持ちしませんよ

（高見・久野 2006: 221）

高見・久野 (2006) は使役主の重要性を取り上げ、意味の「直接性」を用いて、使役受身が適格となる条件として(23)のように規定している。

(23) 使役受身文に課される意味的・機能的制約

使役受身文は、当該の使役事態を引き起こす直接的要因になっており、被使役主(主語指示物)がその使役事象の直接的対象になっている場合にのみ、適格となる。

(高見・久野 2006: 226)

この使役主を重視した制約で、従来容認が困難とされていた例が説明可能になる。例えば、(20b)の「花が咲かされた」という文だけでは容認されにくいが、被使役主の役割を明示する(22)に言い換えると、容認度が高くなると分析されている。高見・久野 (2006) の直接性制約は、説得力が高く、本稿に大きな示唆を与えた。

2.3 まとめと本論の研究課題

以上の議論を踏まえると、先行研究における主要な知見は次のとおりである。

(24) a. 使役受身文の用法

使役受身文は、「誘発」と「強制」の 2 つ用法に大まかに分かれる。

b. 動詞の語彙意味的条件

「誘発」用法の使役受身文に生起する動詞は思考動詞・感情動詞である。「強制」用法の使役受身文に生起する動詞は基本的に意志動詞である。ただし、無意志動詞であっても、使役主の役割を明示に強調する場合は使役受身文に生起可能である（高見・久野 2006）。

これらの先行研究はそれぞれに有用な知見を提供しているが、体系的・包括的な分析には至っていない。本稿では、これらの知見を踏まえつつ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』のデータに基づき、日本語の使役受身構文について以下の三点から体系的記述を試みる。

① 使役受身表現として実際に用いられている動詞の種類とその特徴

② 被使役主および使役主の有情性とその文法的振る舞い

③ 「（さ）せられる」と「（さ）される」の形態的・意味的選好傾向

本稿を通じて、従来断片的に扱われてきた使役受身表現の意味機能と形態の関係性を整理し、日本語文法における体系的理解の一端を明らかにすることを目指す。

3 使役受身文構文における動詞使用の実態調査（BCCWJ）

3.1 例文の検索方法

本稿では、BCCWJ における短単位検索を用いて、「（さ）せられる」と「（さ）される」の 2 形式を区別して検索した。これは、語種によって生起しやすい形式に傾向が見られるためである。一般に、「（さ）される」は和語にのみ現れ、「（さ）せられる」は和語・漢語の両方に現れる。このような形態的傾向を踏まえ、検索式を以下のように設定した。

(25)　使役受身表現の検索式（BCCWJ）

a.　（さ）される形

キー: (品詞 LIKE "動詞-一般%" AND 活用型="五段-サ行" AND 活用形="未然形-一般")

AND 後方共起: (語彙素="れる" AND 品詞 LIKE "助動詞%") ON 1 WORDS FROM キー

b.　漢語＋（さ）せられる形

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%")

AND 後方共起: (語彙素="させる" AND 品詞 LIKE "助動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="られる" AND 品詞 LIKE "助動詞%") ON 2 WORDS FROM キー

c.　和語＋（さ）せられる形

キー: (品詞 LIKE "動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%")

AND 後方共起: (語彙素="させる" AND 品詞 LIKE "助動詞%" AND 活用形 LIKE "未然形%") ON 1 WORDS FROM キー

AND 後方共起: (語彙素="られる" AND 品詞 LIKE "助動詞%") ON 2 WORDS FROM キー

上記の条件に基づいて得られた用例から、使役可能文や受身文、尊敬表現などの類似形式を手作業で除外した。今回、最終的に得られた使役受身文の用例数は、合計 13,040 例である。

3.2 使役受身文における動詞使用の実態

使役受身文において高頻度[4]で使用される動詞を以下に示す。（さ）せられる形をとる動詞については表 1 に、（さ）される形をとる動詞については表 2 にまとめた。

和語＋（さ）せられる形			漢語＋（さ）せられる形					
順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数
1	考える	257 例	**1**	感心する	63 例	**16**	発展する	14 例
2	感じる	89 例	**2**	痛感する	45 例	**17**	変化する	14 例
3	止める	75 例	**3**	納得する	36 例	**18**	直面する	13 例
4	食べる	48 例	**4**	認識する	34 例	**19**	解散する	13 例
5	思う	23 例	**5**	移住する	27 例	**20**	約束する	12 例
6	受ける	21 例	**6**	実感する	26 例	**21**	参加する	12 例
7	聞く	21 例	**7**	従事する	20 例	**22**	勉強する	10 例
8	嘗める	17 例	**8**	満足する	18 例	**23**	従属する	10 例
9	覚える	14 例	**9**	入院する	18 例	**24**	結婚する	10 例
10	見る	13 例	**10**	反省する	17 例	**25**	加入する	10 例
11	座る	13 例	**11**	びっくりする	17 例			
12	飲む	12 例	**12**	意識する	15 例			
13	行く	10 例	**13**	感動する	15 例			
14	負う	10 例	**14**	移動する	14 例			
15	変える	10 例	**15**	苦労する	14 例			

表 1　（さ）せられる形をとる高頻度の動詞一覧表

[4] 本稿において、粗頻度 10 以上の動詞を表にして高頻度として扱っている。

和語＋（さ）される形								
順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数	順位	語彙素	用例数
1	聞く	1052 例	**31**	働く	73 例	**61**	揺り動く	20 例
2	知る	618 例	**32**	煩う	69 例	**62**	支払う	20 例
3	悩む	614 例	**33**	取る	68 例	**63**	味わう	20 例
4	驚く	434 例	**34**	買う	67 例	**64**	投げ飛ぶ	20 例
5	立つ	341 例	**35**	書く	67 例	**65**	重ね合う	19 例
6	待つ	319 例	**36**	座る	67 例	**66**	引き剥ぐ	18 例
7	思い知る	307 例	**37**	浮く	66 例	**67**	思い込む	17 例
8	動く	296 例	**38**	付き合う	63 例	**68**	走る	17 例
9	惑う	240 例	**39**	背負う	63 例	**69**	蹴散る	16 例
10	飛ぶ	237 例	**40**	突き飛ぶ	57 例	**70**	狂う	16 例
11	吹き飛ぶ	233 例	**41**	行く	56 例	**71**	手伝う	15 例
12	励む	203 例	**42**	脱ぐ	53 例	**72**	迷う	14 例
13	済む	190 例	**43**	巡る	50 例	**73**	抜く	14 例
14	張り巡る	179 例	**44**	払う	46 例	**74**	散る	13 例
15	遣る	175 例	**45**	凝る	46 例	**75**	会う	13 例
16	気付く	163 例	**46**	合う	45 例	**76**	悟る	13 例
17	組み合う	152 例	**47**	蹴飛ぶ	41 例	**77**	開く	12 例
18	飲む	136 例	**48**	掴む	40 例	**78**	使う	12 例
19	負う	134 例	**49**	鳴る	40 例	**79**	売り飛ぶ	12 例
20	減る	112 例	**50**	弾き飛ぶ	38 例	**80**	打っ飛ぶ	11 例
21	遭う	105 例	**51**	跳ね飛ぶ	37 例	**81**	縫い合う	11 例
22	剥ぐ	98 例	**52**	読む	35 例	**82**	呼び習う	11 例
23	躍る	97 例	**53**	戦う	33 例	**83**	信じ込む	11 例
24	泣く	88 例	**54**	歩く	30 例	**84**	笑い飛ぶ	11 例
25	持つ	87 例	**55**	噛む	27 例	**85**	歌う	11 例
26	食う	87 例	**56**	撒き散る	26 例	**86**	組む	10 例
27	研ぎ澄む	86 例	**57**	担う	24 例	**87**	曇る	10 例
28	遣う	79 例	**58**	言う	23 例			
29	利く	75 例	**59**	打ち鳴る	22 例			
30	突き動く	74 例	**60**	引き合う	21 例			

表 2　（さ）される形をとる高頻度の動詞一覧表

3.3 観察

3.2 節の結果から、使役受身表現において高頻度で使用される動詞は、基本的に意志動詞であることがわかる。これは先行研究の知見とも一致する。一方、表 1、表 2 では頻度が低いため明示されていないが、以下のような無意志動詞の用例も BCCWJ から確認できた。

(26)　スキー板が弧を描く場面で重心位置が谷側に動かされていることがわかります。

(『月刊 SKI JOURNAL』, BCCWJ, PM21_01409)

(27)　定義を不明確にしたままの女性性の賞讃は、女性ならば誰でもが、人間への関心、感受性、集団的論理をもっている、当然もたなくてはならない、というように、義務と規範にまで強化させられはしないか。

（『ドイツ二つの過去』, BCCWJ, LBm3_00166）

(28)　（言語の）この拡張により、他の言語は消滅させられたり、駆逐されたり、あるいは吸収されたりする。　（『消えゆく言語たち』, BCCWJ, LBp8_00008）

これらの無意志動詞は、語彙的に対応する他動詞をもたない無対自動詞[5]であり、「（さ）す」あるいは「（さ）せる」という文法的使役を介して使役受身形が可能になる。これに対し、次の(29)、(30)のような有対自動詞を使役受身化した文は、一般に非文と認識される。語彙的使役（例 :「集められる」「温められる」）と文法的使役（例 :「集まらされる」「温まらされる」）が競合する場合、原則として語彙的使役が優先される。そのため、有対自動詞をもとにした使役受身文は容認されにくい。この点は、寺村 (1982) 、野田 (1991) が指摘する使役構文における制約と整合できる。

(29)　*　小物が子供に集まらされた。　（作例）

[5] 奥津 (1967) を参考に、対となる動詞を「「アク」「アケル」の様に、ある種の意義的同一性を保ちながら、自動詞と他動詞と別れている動詞」と規定する。無対自動詞はすなわち対応する他動詞を持たない自動詞を指す。ただし、本稿では「（さ）す」語彙素を語彙的なヴォイスではなく、文法的なヴォイスの使役として扱う。5.2 節で根拠を詳述する。

(30) ＊ みそ汁が夫に温まらされた。 （作例）

また、「誘発」用法に関しては、従来より思考・感情を表す動詞が用いられるとされてきた。表 1、表 2 における感情・思考動詞の分布を観察すると、感情自動詞については以下のような用例が確認された。

(31) エッフェル塔では東京のラッシュアワーのような人ごみに驚かされ、凱旋門では車の洪水にびっくりさせられます。

（『頭にやさしい雑学読本』, BCCWJ, LBf4_00004）

(32) たとえば、道行く人にかける言葉にしても、ずいぶん感心させられた。

（『届かなかった贈り物』, BCCWJ, PB59_00488）

しかし、感情動詞のうち、「愛させられる」「憎まされる」「羨まされる」などの感情他動詞を用いた使役受身表現は、BCCWJ では確認されなかった。

以上、本章では、BCCWJ を用いたデータ収集と観察を通じて、使役受身構文における動詞の使用傾向を検証した。「強制」用法においては、意志動詞が使われやすいという先行研究の知見が、本調査によっても裏付けられた。また、無意志動詞を用いた使役受身文が一定数存在することが確認され、それらは基本的に無対自動詞に限定されることも明らかになった。さらに、「誘発」用法における感情動詞の使用傾向として、感情自動詞は使役受身化が可能である一方、感情他動詞は使役受身形では用いられにくいことが分かった。

4 使役主、被使役主の有情性における考察

第 3 章では、使役受身表現における動詞の使用実態について分析を行った。続く本章では、使役受身文における使役主および被使役主の有情性に注目し、それぞれの性質と文中での振る舞いについて記述していく。特に、有情物か無情物かという点が、意味解釈や構文の分類にどのような影響を与えるかを中心に考察を進める。

4.1 使役主の有情性

BCCWJ から収集した使役受身文の用例を観察した結果、使役主として現れる要素は大きく分けて「有情物」と「コト（無情）」の 2 種類に分類できることが分かった。有情物が使役主となる場合、その多くは意図的な働きかけを伴っており、意味的には「強制」のニュアンスが強くなる傾向がある。以下に示す用例はいずれも、意図を持った有情物による働きかけによって、被使役主が本意に反する行為を強いられていることが読み取れる。

(33) 父が劇団を作って公演に回っていたので、私は四歳の時、舞台に立たされたことがあるんです。（『週刊文春』, BCCWJ, PM31_00214）

(34) 幼稚園を母親によってやめさせられた俊君は、せっかくの自立のチャンスを母親によって断ち切られてしまいました。

（『ちゃんと「自分でできる子」に』, BCCWJ, LBq3_00104）

(35) 本人の全く知らぬ間に精神病であるというレッテルをつけられ，警察，保健所によって強制的にＥ病院に入院させられました。

（『精神保健福祉論』, BCCWJ, PB53_00428）

一方、使役主が「コト」などの無情物である場合、それはしばしば状況や出来事といった要素であり、そこから生じる影響によって被使役主の感情や思考が引き起こされるという構図が見られる。このような場合、使役行為は意図的ではなく、むしろ出来事が「誘因」となって、結果的に使役的な状況が生じたと解釈される。以下の例に見られるように、被使役主の心理的・行動的変化が、非意図的に引き起こされる様子が示されている。

(36) ねっしんな町会長さんのたのみにうごかされたわたしは、つぎの日の朝早く、その町へでかけていった。（『お父さんは鳥のように』, BCCWJ, LBcn_00025）

(37) 民社党の塚本委員長が秘書を通じて多額の儲けをしていたことなどをみると、なるほどと思わされます。（『巨悪 vs 言論』, BCCWJ, LBh3_00106）

(38)　まったく医学的根拠のない迷信だけが残されて、無意味な悩みに苦しまされるようになってしまった。　（『十五歳の自分探し』, BCCWJ, PB23_00191）

このように、使役主が有情物であるかコトであるかによって、使役の意味合いや使役受身文全体の解釈に大きな違いが生じることが明らかとなった。

4.2 被使役主の有情性

使役受身文における被使役主、すなわち主語となる要素についても、有情性に注目すると興味深い傾向が見られる。従来の研究では、使役受身構文における典型的な用法として、「強制」と「誘発」の 2 つが挙げられている。「強制」用法では、他者の意図的な働きかけによって、被使役主が自分の意志に反して行為を実行させられる。一方、「誘発」用法では、感情や思考といった内的変化が、自然に引き起こされる点が特徴である。いずれの用法においても、被使役主は基本的に意志や感情を持つ有情物であることが前提とされている。

しかし、実際の用例には、無情物が被使役主として用いられている例も確認できる。以下に挙げる例は、非典型的な使役受身構文として注目に値する。

(39)　痛さを感じる神経は麻痺させられていても、内臓の痛みに耐えているのでしょう。
（『わが性と生』, BCCWJ, OB3X_00243）

(40)　染め上がった革は、周りの壁に張って乾かされる。
（『シュクラン！』, BCCWJ, PB12_00124）

(41)　霧雨で街灯が曇らされ、歩道をつややかに照らしている。
（『飛蝗の農場』, BCCWJ, PB29_00590）

これらの例では、被使役主が有情性を持たないにもかかわらず、「（さ）せられる」あるいは「（さ）される」という使役受身の形が用いられている点が特徴的である。これらの文は、単純に「強制」あるいは「誘発」として分類することが困難だが、共通点として、被

使役主が外部からの作用によって強制的に変化を被っている点に注目すべきである。この意味で、無情物主語の使役受身文も、広義の「強制」的な意味を持つと捉えられる。

以上を踏まえ、本稿では従来の「強制」用法の枠組みを拡張し、無情物主語の文も含めて以下のように規定する。

(42)　使役受身構文の「強制」意味

使役主の意図的な働きかけによって、被使役主が変化を強制的に被ることを表す。典型的な場合、被使役主が不本意である。

以上のように、本章では使役受身構文における使役主および被使役主の有情性に注目し、それぞれの特徴と用法の違いについて考察した。とりわけ、無情物が被使役主となる用例を含めて、「強制」意味をより広く捉える視点を提示した点が本章の特徴である。これは従来の研究の枠組みを補完・拡張するものとして考えられる。

5 「（さ）せられる」と「（さ）される」形式における考察

ここまで使役受身構文における動詞、使役主、被使役主の振る舞いを概観してきた。本章では、使役受身文の形態的特徴、すなわち「（さ）される」と「（さ）せられる」の両形式を対象に分析する。5.1 節では両形式の意味的な違いや使用傾向を整理し、5.2 節では両形式を共に使役受身として扱う立場の根拠を述べる。

5.1 「（さ）される」と「（さ）せられる」の使い分け

3.1 節でも述べたように、BCCWJ における用例では、「（さ）される」は和語動詞のみに現れ、「（さ）せられる」は和語・漢語の両方に出現する傾向がある。漢語では「（さ）せられる」のみが使用されるため、本節では和語に限定して両形式を比較する。

まず多くの和語動詞において、「（さ）される」と「（さ）せられる」は意味的にも帰納的にもほぼ同等で、置き換えが可能である。たとえば「立つ」に関する以下の例では、どちらの形式も使用されており、意味や文脈上の差異はほとんどない。

(43) a. 祭りばやしに合わせて、おどり衆が列になっておどる、その先頭に四郎は立たされたのだ。（『福の神になった少年』, BCCWJ, LBln_00035）

b. きまりきった町長の弔辞、訳の分らない坊さんのお経、一時間も二時間もお寺の庭に立たせられたものでした。（『『青鞜』女性解放論集』, BCCWJ, LBf3_00087）

(44) a. なにも悪いことをしていない日本が、たいへんな苦境に立たされている。（『東京は 60 秒で崩壊する！』, BCCWJ, LBf3_00022）

b. 一つは、やはり下請企業が大変今苦境に立たせ られておるというのが現況でございます。（『国会会議録』, BCCWJ, OM65_00002）

一方、優先傾向がみられる場合もある。五段動詞や「す」で終わる一段動詞では、「（さ）される」形式にすると音韻的に「さ」が連続するため好まれず、「（さ）せられる」の使用が圧倒的に多い。たとえば「食べる」に関しては、(45)の「食べさせられる」形式は BCCWJ に 48 例もみられるのに対して、(46)の「食べさされる」形式は 1 例しか確認できず、ごく稀である。

(45) 頭取さんが食べられない分（茶碗半杯分）も食べさされましたがね（笑）（「Yahoo!ブログ」, BCCWJ, OY11_03479）

(46) しかも、最後まで残されて食べさせられる。（『みんなのなやみ』, BCCWJ, PB41_00234）

また、無情物主語で物理的な状態変化を表す文脈では、「（さ）される」が優先される傾向がある。以下の例においては、BCCWJ に「（さ）せられる」の形は確認できない。

(47)　死斑は見られないから、ほかの場所で殺害され、二、三時間以内に（死体が）動かされたものと考えられる。　（『刹那の囁き』, BCCWJ, PB39_00223）

(48)　樹林帯を越えると、雪が飛ばされて凍った地面が出ている斜面が延々と続く。

（『風の地平』, BCCWJ, PB39_00440）

(49)　目の前に広がる海は真っ暗で、波の音はたえまなく鳴らされる太鼓に似ていた。

（『キッドナップ・ツアー』, BCCWJ, PB39_00023）

このように、物理的移動や状態変化を伴う動詞（「動く」「飛ぶ」「鳴る」など）では、「（さ）される」形がより好まれる傾向がある。ただし、こうした傾向が他の動詞にも当てはまるかどうかは、さらなる調査が必要である。

5.2 「（さ）」される」を使役受身表現とする立場

(47)の「動かされる」、(49)の「鳴らされる」の例では、形式的には「動かす」「鳴らす」という他動詞の受身と捉えることもできる。しかし、本稿はこれらも使役受身表現と見なす立場を取る。理由は以下の通りである。

第一に、「（さ）す」語彙素の生産性が高く、多くの自動詞に結合して新たな他動詞を形成できる点が挙げられる。これに対し、「開く―開ける」「温まる―温める」などの語彙的対応は限定的で、非生産的である。したがって、「（さ）す」は語彙的よりも文法的なヴォイス、すなわち使役として扱うのが妥当だと考える。

第二に、「（さ）される」と「（さ）せられる」は機能的・意味的に大差なく、多くの文脈で相互に置換可能である点が挙げられる。

第三に、影山 (1993) や高見・久野 (2006) といった先行研究も、両形式を区別せず使役受身表現として扱っている。したがって、本稿は「（さ）される」も使役受身表現の一部として捉える立場をとる。

ただし、本稿は「（さ）す」語彙素の文法化にも段階があることを認める。「動かされる」「鳴らされる」のように、「（さ）す」が動詞と一体化し、使役的意味が希薄になっている用法も存在する一方で、「立たされる」「入らされる」などは、明確な使役的意味を保持している。

6 結論

本稿は、日本語の使役受身表現「（さ）せられる」「（さ）される」に注目し、『現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)』に基づいて、その意味機能および形態の実態を記述的に分析した。従来の研究では、「強制」「誘発」といった意味用法の分類や、動詞の語彙的制約、構文の適格性に関心が払われてきたが、実際の用例を体系的に調査し、形態・意味・使用傾向の全体像を捉えようとする試みは多くない。本研究は、以下の三点に焦点を当て、使役受身表現の体系的な記述を目指した。

第一に、動詞との生起傾向に関しては、従来通り、使役受身文が基本的に意志動詞を中心に形成されるという先行研究の知見が、13,000 例以上の用例分析によって再確認された。一方で、無意志動詞との結合も一定数確認され、特に語彙的に対応する他動詞を持たない無対自動詞での使役受身化が自然に成立していることが示された。これに対し、語彙的使役をもつ有対自動詞からの使役受身化は非文とされる傾向が強く、語彙的使役と文法的使役の相互作用に制約が存在することが明らかになった。

第二に、使役主および被使役主の有情性に関する観察から、使役受身構文においては、有情物を主語とする典型的な「強制」「誘発」用法に加え、無情物が主語となる非典型的な用例も自然に生起していることがわかった。これらは従来の分類には収まりきらないが、いずれも「外部からの働きかけにより変化を受ける」という点において共通しており、本稿ではこうした無情物主語の用法を広義の「強制」用法と位置づけた。これにより、「強制」概念の意味範囲が拡張され、構文の多様性に柔軟に対応する分析枠組みが提案された。

第三に、形態の観点からは、「（さ）される」と「（さ）せられる」という二形式の使い分けにおいて、語種や音韻的制約、意味的要因が関与していることが確認された。特に、「食

べさされる」など「さ」の連続を含む形式は使用頻度が極端に低く、音韻的要因によって「（さ）せられる」への集中が生じている。また、無情物主語＋物理的変化動詞の文脈では「（さ）される」形が好まれる傾向も観察され、意味と形式の対応関係において新たな知見が得られた。

以上の分析を通じて、使役受身表現は意味・形態ともに多様性を持ちつつも、明確な使用傾向と構造的制約のもとに成立していることが明らかとなった。従来の「強制」・「誘発」という二項対立的な枠組みを超え、構文の柔軟性と体系性を両立させる記述的枠組みが必要であることを示唆している。

今回は動詞の使用実態に注目したが、今後は被使役主、使役主の性質もデータに基づいて分析する必要がある。特に、無情物主語＋物理的変化動詞の文脈で「（さ）される」形が好まれるという傾向は観察的な指摘にとどまっており、今後はその実態を定量的に検証していきたい。

参考文献

奥津敬一郎 (1967)「自動化・他動化および両極化転形―自・他動詞対応―」『国語学』70: 46-66.

影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

小嶋栄子 (1998)『現代日本語のうけみ文の研究―その意味と機能及び文学作品における使用について』大東文化大学博士学位論文.

高見健一・久野暲 (2006)『日本語機能的構文研究』東京：大修館書店.

寺村秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味I』東京：くろしお出版.

日本語記述文法研究会 (2009)『現代日本語文法 2』東京：くろしお出版.

野田尚史 (1991)「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄（編）『日本語のヴォイスと他動性』東京：くろしお出版.

前田直子 (1989)「「使役受動態」の意味と用法」『言語・文化研究(Studies in Language and Culture)』7: 25-32, 東京外国語大学.

松下大三郎 (1977)『標準日本語口語法』東京：勉誠社.

村上三寿 (1986)「うけみ構造の文」言語学研究会（編）『ことばの科学 ： 言語学研究会の論文

集』1: 7-87, 東京：むぎ書房.

コーパス

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』（最終検索 : 2025 年 5 月 12 日）